

## 『道徳と宗教の二源泉』における 「自然」概念について

—エゴイズムと自己犠牲の諸相との関係において—

石井敏夫

ベルクソンによれば、私たち各人の奥底には種としてのヒトの「素質（dispositions）」が存在しており、人格の「自然」とも呼ぶべき私たちのその基層は倫理学者や社会学者が是非とも考慮に入れるべきものである（MR, 291）。彼がこのような見解を抱くに至ったのは、人間の内なる「自然」というものを想定せずには、人間が知性的であるがゆえに絶えず陥りがちな不安やエゴイズムが絶えまなく退けられて、少なくともそれらが社会にもたらしうる深刻な危機が不断に回避されているという事実を説明できないと考えたからだ。しかし、私の見るところでは、このような文脈で提起されるベルクソンの「自然」概念が真実なら、後で検討するような例外的な状況下では私たちは必ずやある種の道徳的ジレンマに陥ることになる。そして、そのことは倫理学や社会学に重大な問題を提起する。というのも、そのことは、社会が自らの自然的基礎に立ち返ることで自らの問題を解決しようとするとかえって身動きがとれなくなる場合があるということを示唆しているからだ。もっともベルクソン自身は「自然」概念を越えて進まなければ謎のままにとどまる道徳・宗教現象および社会現象が存在すると考え、最終的には、「自然」がそこへと追い込まれる可能性を残す袋小路を知らない非「自然」的な原理が存在するという立場をとる。私としては、様々な学問領域で自然主義批判をへた上で自然概念が復権されつつある今日の状況を鑑み、「自然」について冒頭に述べたような見解を取ったベルクソンにおいてすら、「自然」はすべての問題を解きうるマスターキーにはなりえなかったばかりか、それ固有の決定不能状態を引き起こしてしまうことを確認しておきたい。彼の「自然」概念からどんな教訓が引き出せるかを熟慮せずには、彼の最終的な解決を正しく評価することもできないだろう。

道徳であれ宗教であれそれらが人々を結び合わせる絆として機能する場合、そこには多かれ少なかれ何らかの自然的要素が含まれている。ベルクソンがそうした要素を

主題化する際には「閉じた」とか「静的」という概念を持ち出すことは周知の通りである。だから彼が「自然」と呼ぶものがどのような性格を帯びているかを知るには、「静的宗教」とか「閉じた道徳」と呼ばれているものの機能を特定すればよい。まず、「静的宗教」には二つの機能があるとされる。「社会の保存に直接かかわっている機能」と「社会の利益のために」「個人の活動を刺激し方向づける」機能である（MR, 134）。具体的には前者は個人を「規律」によって拘束する機能であり、後者は個人に生きるための「力」を授ける機能である（MR, 212）。第二の機能が「社会の利益のため」になるとすれば、それは社会が存続するためにはとにかくにも個人が存続しなければならないからである。しかし、社会の生が精力的に営まれるためには個人の活動が持続的に社会へと「方向づけ」られた形でなされなければならないから、「静的宗教」が個人を「力」づける場合には、いつも個人を社会へと「方向づけ」る形でそうするのである。「閉じた道徳」にも同じような機能がある。個人を社会のうちに住ませ、少なくとも社会につなぎとめているのは「個人のなかの社会」（MR, 11）である。この内なる社会は現実の社会によって時間と労力が費やされて社会化されるにいった自我であるという意味で「社会的自我」とも呼ばれる。この各人に内的な社会が各人に「規律」と「力」を与えるとき、社会は緊密な空間になる。つまり社会は整然と秩序づけられたエネルギーの充満する場となるのである。すると、宗教にせよ道徳にせよ「自然」を基礎とするものである限りは、そこには秩序破壊の禁止といわば活動力能の低下への警戒が暗黙の要求として含まれていることになる。

さて、いまここで秩序を乱すことへの暗黙の禁止命令を〈殺すな〉という命法で、活動力能の弱体化への暗黙の警戒を〈死ぬな〉という命法で言い表せると仮定してみよう。この仮定が許されるなら、諸個人が共に存在することを可能にする「自然」が個人に従わせようとする命令は〈殺すな〉、そして〈死ぬな〉、というものであることになる。その上で、いまかりにある人が次のように言い表せる窮地に追いやられていると想定してみよう。すなわち、「私が生き延びるためには彼が犠牲にならなければならない、彼が生き延びるためには私が犠牲にならなければならない」。このような状況下では私の内なる「自然」は優柔不断になり結果的に無力にならざるをえない、というのがベルクソンの「自然」概念からの自然な帰結であるように思われる。以下ではこの点をはっきりさせるために、「自然」のいわば意向をエゴイズムと自己犠牲の諸相との関係で明らかにしてみよう。

『二源泉』が想定する内なる「自然」が明らかにその力を働かせるのは—それが力を発揮できるのであれできないのであれ—例えば次のようなエゴイズムが力をふるう

場合である。「彼がいても私の存在が脅かされることはないが、彼がいると自分の存在がより満足のゆくものにならない。自分の思い通りにするにはどうしても彼が邪魔だ。邪魔者には消えてもらわねばならぬ」。いまかりにこのような衝動にとらわれた「私」がその衝動に身をまかせそうになるとき、ペルクソンの理解では、〈殺すな〉という命令が発動されるはずである。「私」は生きることに食欲になっているのだから、「私」の存在はいまのところ〈死ぬな〉という命令が発せられるような状況にはない。「私」の生きる意欲に関しては「自然」は安心してさえいるだろう。ここで「自然」が絶対に許さないのは「私」が「彼」の存在を抹消しようとすることである。では、なぜここでは〈殺すな〉が命令になりうるのか。それを課す「自然」の論理はどのようなものなのか。この問いに関して『二源泉』から引き出しうる解答は二つの部分に分けられよう。第一の部分は、「私」の「自然」にとっては「彼」を消すことは「私」を含めた社会全体を消すことにつながりかねない、というものである。「彼」を殺すことは明確な秩序破壊であり、その効果は全体に及びうるからだ。「彼」を〈殺すな〉は誰も〈殺すな〉を潜在させているのだ。同じことがそっくりそのまま自己犠牲の次のようなケースにもあてはまる。「私が死んでも死ななくても状況はたいして変わらないかもしれない。私一人の死にそれほどの重みはないかもしれない。だが、私は私の死をもってこの不正に抗議したい」。「私」がこの抗議を実行に移しそうになるやいなや、今度は「自然」は〈死ぬな〉という命令を発するはずである。それは「自然」のうちでその死が無駄に終わるかもしれないとか、無意味だとかという判断が働くためではない。そうではなくて、「私」が死ぬことは全体が死ぬことにつながりかねないからである。

ところが、「自然」の論理が上に見たようなのだとすると、その裏をかくようなエゴイズムが存在しうることになる。「殺さないのは死なないためだが、死なないのは殺さないためではない。そして私は殺さない」という生き方がそれである。これは「生きるためにのみ生かす」というエゴイスティックな生き方である。確かにこの生き方は「生きるためといえども、殺さずに生きられるなら決して殺さない」という掟が守られている限りは「自然」と合致する。しかし、この生き方では生きる意欲が失われるときには殺さない理由も一緒に失われてしまう。つまり、この生き方は生きることに食欲である限りにおいてのみ「自然」と一致するのであって、〈死ぬな〉が踏み破られそうになるときには〈殺すな〉が無意味になりかねない点で「自然」の要求する生き方ではないのだ。自己犠牲にもこの種の逸脱が生じうる。「死なないのは殺さないためだが、殺さないのは死なないためではない。そして私は死なない」。こち

らは「生かすためにのみ生きる」ともいうべき生き方である。この生き方は「生かすためといえども、死なずに生かせるなら決して死なない」という格率が遵守されている限りは「自然」と矛盾しない。だが、この生き方では生かす意欲が失われるときには生きる理由もなくなる。「生きるのは生かすためであって、生かすのは生きるためではない」という在り方は、もしそれが現実になされるなら、不「自然」なのである。この二つのケースでは「自然」は「私」の生き方がそれに沿っている限りは「私」を放置するが、それから逸れ始めると「私」の論理からは出てきやうがない命令を発して「私」を遮るはずだ。殺さない理由が見い出せない「私」に〈殺すな〉と命じ、死なない理由が見当たらない「私」に〈死ぬな〉と命ずるのだ。なぜなら存在させることと存在することとの分離を知らない「自然」は、「存在するためにのみ存在させる」という論理も「存在させるためにのみ存在する」という論理も知らないからだ。だが、それは「私」が存在することと「彼」が存在することとのあいだに何の区別もないということではない。「私」が存在することと「彼」が存在することは分離できないままに別々であるに違いない。言い換えれば、〈殺すな〉は〈死ぬな〉に合流する面をそなえつつも〈死ぬな〉とのあいだにずれを含んでいるはずであり、逆もまたしかりであるはずだ。さもなければ「自然」は「殺さなくとも生きられるが、より満足できる生を手にするためなら殺すことも厭わない」というエゴイズムや、「死ななくとも生かせるが、より満足できる生を与えるためには死ぬことも厭わない」という自己犠牲に容易に道を譲ってしまうだろう。「自然」がこれらの不「自然」な誘惑を阻止しようとするのは、「自然」においては「私」の存在と「彼」の存在は分離できないにもかかわらず一方が他方に還元できないような仕方与えられているからに違いない。「私」がより満足のゆく生を手にする必要だけのために邪魔者の「彼」を抹消しようと思いつくとき、「私」に対して「自然」が〈殺すな〉の命令を発する際の論理はどのようなものか、という問いに対して、ベルクソンが与えうる答えの第二の部分は以上のようなものであるはずだ。付け加えておくと、満足を得るためには殺人も厭わないエゴイズムや満足を与えるためには自殺も厭わない自己犠牲は上述のような「自然」にとっては明白な敵なのだが、これらの不「自然」は「自然」とまったく無関係であるというわけではない。生の未来の不確実性に極度の不安を抱き続けていると、〈死ぬな〉が自らに完全には合流しない〈殺すな〉を重荷に思い始め、ついにはそれを自らの面前から消してしまおうとする場合と、反対に〈殺すな〉が自らに完全には合流しない〈死ぬな〉を邪魔者扱いするようになる場合が出てこよう。いずれの場合も「自然」は引き裂かれて断片化してしまうだろう。無情なエゴイズムとは深く

激しい不安にかられた〈死ぬな〉であり、自己処罰に等しい自己犠牲とは鋭く強い不安にかられた〈殺すな〉なのだ。もう一つ付け加えておけば、「存在するためにのみ存在させる」という論理や「存在させるためにのみ存在する」という論理はやはり不安に囚われて断片化してしまった「自然」から発生するのであって、前者は意識の明るみで〈殺すな〉を〈死ぬな〉に一方的的にのみ合流させ、後者は同じ意識の明るみで反対に〈死ぬな〉を〈殺すな〉に一方的的にのみ合流させることに存している。

では、「私が存在し続けるためには彼の存在が犠牲にならなければならない、彼が存在し続けるためには私の存在が犠牲にならなければならない」という状況においては、「私」にはどんな選択が可能だろうか。「私」が生きるために「彼」に犠牲を強いるか、「彼」を生かすために「私」が犠牲になるか、さもなければ運を天にまかせるかのいずれかである。「自然」はいずれの決断も気に食わないだろう。最後の決定は共倒れの危険を、言い換えれば「自然」の二つの命法に同時に背く危険をはらんでおり、最初の決定は一方の命法に抵触し、二つ目の決定は他方の命法に抵触するからだ。従って、「私」がいずれかの道に踏み出そうとすると「自然」は「私」を引き留めようとするはずであり、「私」を未決定の状態にとどめようとするに違いない。すなわち、ここでは「自然」は自らの優柔不断を「私」に染み込ませようとするだろう。「私」が何らかの決断を下し、それを実行に移すには、「私」は「自然」のそうした誘惑を振り切らなければならない。

「私」は生き延びるために「彼」に犠牲を強いざるをえないという決断をすることは、「自然」の論理からすればエゴイズムとはいえない。「私」は少なくとも共倒れの危険は回避しているのであり、「自然」の論理はどちらか一方しか助からない場合、それがどちらであるべきかについては無関心であろうからだ。「自然」はどちらが助かるのであっても、それがどちらかでしかありえないということに反対なのであり、最後まで両者の救出を要求し続けるだろう。「私」がここで行おうとしているのは取捨選択であり、「自然」が抵抗しているのはまさにこの取捨選択なのである。「私」は共倒れの危険を回避するのと引き換えに取捨を断行するのだが、何一つ捨てられない「自然」がそういう取引に応じないことを承知しながら「私」は取捨の問題に取り組む。従って、「自然」は「自然」の論理が行き詰まってしまう状況下でなされる

「私」の決断には沈黙するしかない。「私」と「彼」の立場が逆転したらどうだろうか。「彼」が生き延びるべく「私」が犠牲になるということは「自然」の論理からすれば自己犠牲ではないということになるだろうか。「自然」の論理に忠実である限りはそういわざるをえない。「自然」は「私」が「彼」の身代わりになることには何の

意味も認められないはずだ。

ところが、私たちは想像上で前者のケースをエゴイスティックと感じ、後者のケースを自己犠牲的と感じる場合があるのではないか。こうした類いの感情は何に由来するのか。「自然」の論理の枠内では存在しえない「エゴイズム」の概念や「犠牲」の概念が成立するためには、「自然」の論理とは異なる論理が働いていなければならないことは明らかである。では、例えば「私」が「犠牲」になるという場合、「私」はそれ自体で存在する意味があるという暗黙の了解が働いているのだろうか。言い換えれば、そこに働いている論理は、「私」は絶対に存在しなければならない、というものののだろうか。しかし、よく考えてみると、「私」は私自身のために存在しなければならない、同様に「彼」も彼自身のために存在しなければならないという論理では、

「私」が命を捨てることが「犠牲」となり、反対に生き延びることが「エゴイズム」となるという感じ方は生まれようがない。なぜなら第三者から見ればいずれも絶対という点では対等なのだから、捨てることが「犠牲」となるものを取ることは他の「犠牲」の上に成り立つものとはいえ、不当に自己を優先したことにはならないからだ。では、このような場合に捨てることが「自己犠牲的」であるものを取ることを「エゴイスティック」と感じさせるものは何か。「犠牲」を払うことをやめて存在し続けるという選択がそのまま「エゴイズム」となるというのはどんな論理によるのか。それは「私」は絶対に存在しなければならないにもかかわらず、その存在は私自身のためではないという論理以外には考えられない。だが、それは「彼」もまた絶対に存在しなければならないが、その存在は彼自身のためではない、という論理ではないことに注意しよう。もしそうなら、絶対的な「私」が彼を「犠牲」にして彼の身代わりの上に私自身のために存在することは決して「エゴイズム」とはならないだろう。それが「エゴイズム」となりうるのは、「私」も「彼」も絶対に存在しなければならないが、「私」は私自身のために存在するのではない、という論理が働いている場合に限られる。絶対である「私」が絶対である「彼」のために存在するとき、そこに生まれるのが「犠牲」であり、それにもかかわらず絶対である「私」が自分自身のために存在するとき、そこに生まれるのが「エゴイズム」なのである。『二源泉』におけるベルクソンの立場では、こうした「犠牲」や「エゴイズム」はもはや「自然」に属するものではなく、非「自然」的な何かを前提として初めて成立する。ベルクソンが「…自然の下を掘り下げ、そして生命の飛躍そのもののなかに戻ってゆく…」(MR, 291)と述べるときには、そのような非「自然」的な何かへの復帰を意味しているのだ。なるほど確かに彼が「生命の飛躍」に戻ることは「どんな自然とも(avec toute nature)」

絶縁することではないと主張するとき（MR, 56）、彼は明らかに「自然」概念をすでに見たのとは別の新しい意味で用いている。しかし、「自然」という語がまず第一に意味しているのは「生命の飛躍」に立ち返る以前の「自然」なのである。

「自然」は「私」が「彼」の犠牲になるか、「彼」が「私」の犠牲になるかを選択せざるをえない状況を前にして沈黙してしまう。だが、「自然」はいかなる場合にも犠牲を拒むというわけではない。「自然」が自ら進んで犠牲を強いることもある。それは「私」や「彼」が、「私」や「彼」が「自然」な仕方では属する「全体」のために犠牲になることである。「細胞は必要とあれば全体のために自ら犠牲となるだろう。その際その細胞はもし意識をもっているとすれば、疑いなく自分が犠牲になるのは自分自身のためにである、と思ひ込むだろう」（MR, 33）。たとえ細胞が「全体」の犠牲になるのはあくまでも「自分自身のため」だと思ひ込もうとしても、それは「自分自身のため」と「全体」のためが、言い換えれば部分と全体が区別できないような次元での犠牲であることに変わらない。区別できないということが「自分自身のため」という思ひ込みを可能にする条件なのである。個人が個人の犠牲になるという発想は「自然」の与かり知らぬところだが、「自然」は「全体」のためになら部分を犠牲にしてもかまわないのであって、そのことが意味しているのは、「私」が「私」として、「彼」が「彼」として存在しなければならないとしても、それは「全体」が安泰であるという条件においてのみであるということだ。「自然」の観点からは、「私」が「彼」を犠牲にして存在する理由はないし、「彼」も「私」を犠牲にして存在する理由がなく、ましてや「私」や「彼」が「全体」を犠牲にして存在する理由はない。だが、「自然」は「全体」のためにはどうしても「私」や「彼」が犠牲にならなければならないという状況ではそれを推し進める傾向がある。実際、政治は「全体」のために特定の個人が犠牲になることを要求することがあるが、ペルクソンは政治のそのような振る舞いを「政治的本能」（MR, 298）に発するものと考えている。「政治的本能」がそのような要求を当然のこととみなすのは、この本能は「全体」から分離された個人というものを認めないし、そのような個人には何の関心もないからだ。この本能は分離された個人の「自己犠牲」を利用しさえする。「私」が「全体」を越えた真理や「全体」を越えた愛のために死ぬことと、「政治的本能」がそのような「私」の死を「全体」のために要求することとのあいだには何の矛盾もないからだ。ソクラテスやイエスの死はそのような死なのである。「自然」はあくまでも自らの論理に忠実であり続けるのであり、自らの論理を越えるものすら自らの内部に呑み込んでしまうわけだ。以上の分析全体が暗に示しているのは、「全体」が維持されるという条件が守ら

れる限りは「自然」は何でも黙認するということであり、黙認可能なものが複数存在する場合には何か特定のものを価値として選び取る理由はないということである。

「自然」には黙認できるものとできないものがあるが、黙認できるものの領域では選択の理由がないのだ。倫理学者や社会学者が考慮に入れなければならないのはこのような性格を帯びた「自然」なのである。「自然」の優柔不断は対立項のいずれをも総じて肯定し切れないところから生ずるものであったが、社会が自らの進路を決定する際に調停しなければならない様々な道徳的対立を調停できないでいるのは、それらの対立が対立項のいずれをも否定する理由がない「自然」の沈黙を背景として発生しているからだ。

従って、「自然」における非決定に「エゴイズム」と感じられる終止符を打つのを制止し、「自己犠牲」と感じられる終止符を打つよう呼びかけるものがあるとすれば、それは「自然」に還元できない要素であり、「自然」のジレンマを原理的に解決する非「自然」的な何かである。しかし、その何かは「自然」のジレンマを「自然」に代わって自動的に解決する「自然」の上位機関ではない。非「自然」はそれ自身がそれ固有の次元でそれ固有のジレンマに陥る可能性があるし、そうしたジレンマに見舞われなくても、解決を求め、それを選択するのはあくまでも「私」であるからだ。にもかかわらず、「自然」の非決定のうちで「私」が呼びかけられつつ意志的に選択する解決は、「私」が付与したのでも創造したのでもない価値の色彩を帯びて現れてくる。このことが意味しているのは、「私」がすでに従ってしまっている何か非「自然」的な命法が存在するということであり、その命法は「私」を通じて「私」に「自然」を越えさせ、そのような仕方でのみ自らを明るみに出すということである。ここで明るみに出されてくるものがすでに社会に沈殿していたものである可能性はある。だが、社会がそこに沈殿しているものの創造者であるとすれば、その社会は「自然」の与かり知らない社会、非「自然」的な社会であると考えざるを得ない。「自然」に根差した社会には「自然」の沈黙を破ることができないからだ。ところで、非「自然」的なものの顕現の仕方が以上のようなものとすれば、「自然」とここまで当の「自然」との関係で消極的に非「自然」と規定されてきたものとの関係を積極的に規定するための糸口が得られることになる。「自然」は非「自然」の解決を許す。「自然」がその解決を許容できるのは、その解決が「自然」のつけておいた筋目にそってもたらされるからだ。「自然」においてもすでに〈殺すな〉は〈死ぬな〉に還元されない面をもっていたのであり、〈死ぬな〉は〈殺すな〉に還元されない面をもっていたのである。こうした筋目にそって〈殺すな〉はたとえ〈死ぬな〉が守られなくとも守ら



れるべき絶対命令として浮き上がってくるのであり、従ってまた〈殺すな〉と引き換えに〈死ぬな〉を守ることは「エゴイズム」として浮き上がってくるのだが、しかもなお〈死ぬな〉と引き換えに〈殺すな〉を守ることが「自己」を「犠牲」にすることとして浮き上がってくるのである。ペルクソンは人々がある種の「義務」について考えるときにおのずと思い浮かべる言葉、例えば「献身（devouement）」、「自己贈与（don de soi）」、「犠牲心（esprit de sacrifice）」（MR, 31）などの言葉に注意を喚起しているが、これらの言葉は「自然」が非「自然」と結びうる関係の性質をよく表している。これらの「義務」においては「自然」は非「自然」によって引き継がれることのない自らの要求の痕跡を非「自然」に残しつつ非「自然」のうちに自らを消し去ろうとしているように見える。確かに「自然」を乗り越えてしまっている非「自然」にとっては、これらの義務はこれらの義務としては存在しない。非「自然」の決定が例えば「献身」として現れてくるのは「自然」に対してであり、「自然」に対してでしかないのだ。では、なぜ非「自然」は「自然」の要求の痕跡を自らにとどめておくことを許すのか。それは「自然」が自らの遠縁にあたることを「自然」自身に示すために、そしてまた「自然」にその耳を傾けるべき方向を告げ知らせるためではないか。

「自然」が黙認せざるをえない解決であるにもかかわらず、私たちに呼びかけられている解決とは異なるように感じられる解決というものも確かに存在する。ある解決をそのように感じさせるのは上記の非「自然」であるが、以上の考察から明らかなのは、そのように感じられる解決そのものはおそらく何らかの仕方に変質してしまった「自然」に発するということだ。そのような解決をもたらす変質した「自然」は何か不「自然」な「自然」として私たちのうちに深く住み着いてしまっている可能性すらある。ペルクソンが『二源泉』第三章での「悪の問題」（MR, 275）の考察においてぶつかっていたのはおそらくこの問題だ。宇宙における「私」の寄る辺なさの感情が「私」の内なる「自然」をある仕方に変質させ、そうして変質した「自然」がそのような感情を執拗なものとするとは明らかだからである。